

- 昭和19年11月1日、B29が初めて東京上空に
▽たった1機 房総半島勝浦から侵入
▽午後1時過ぎ 松戸 成増 調布基地から
迎撃戦闘機が発進したが 高度は1万呎
高射砲弾も 7千呎が限度で 届かない
▽都下武蔵野町の 中島飛行機工場を写真撮影
- サイパン攻略は、B29のために行なわれた作戦
▽もともとは 強力なドイツ空軍に対抗のため開発
▽試作1号機が 完成(17年9月21日)すると
対日戦勝利の近道として
ヨーロッパ戦線は 既存のB17 B24に任せ
量産態勢に入った全機を 太平洋戦線に
▽サイパン(19年7月7日) テニアン(8月2日)を占領すると
8月10日には B29基地として 使用開始
マリアナ基地(ガムレット)に 常時1千機配備態勢
- 日本は本土防備強化を急いだが…
▽航空兵力は 陸海軍の実働機が
台湾から本土まで 掻き集めても 626機
▽防空戦闘機870機も 実働は3分の1
▽陸軍は 帝都防空専任部隊として
19年3月8日 第10飛行師団を編成
師団長 吉田喜八郎中将は 11月7日
各基地に B29に対する 特攻隊編成命令
▽海軍は 初の 本土防空専任部隊として
12月25日 松山基地に 第343航空隊
源田實大佐の発案で 新鋭戦闘機「紫電改」と
生き残りの 熟練パイロットを 集める
▽帝都防空部隊として 20年2月5日
厚木に 第302航空隊を新設
B29迎撃用ロケット機「秋水」配備の予定
司令には 敗戦の時「厚木の反乱」の
小園安名(とこのやすな)大佐が 就任
- B29はまず東京の攻撃目標を航空写真撮影
▽本格的な東京空襲は 11月24日昼すぎ
93機で 中島飛行機工場を 集中爆撃

「超空の要塞」B29

全長30呎、幅43呎。最大速度577*₀と
戦闘機並みで爆弾搭載量が最大9ト_ン。
航続距離は爆弾4ト_ンを搭載し5500*₀、
増槽タンクをつければサイパンー東
京間2000*₀を楽々往復出来る15時間
の飛行が可能だった。機内3か所に機
密室があって高度1万呎でも2千呎と
同じ状態を保ち、11人の搭乗員は酸
素マスクなしで行動出来た。低空飛
行の場合に施す迷彩の必要もなく、
銀色アルミの地肌を輝かせていた。
日本海軍の一式陸上攻撃機に比べ、
爆弾搭載量で9倍、飛行速度で1.5倍、
航続距離は2.4倍だった。

お寒い迎撃能力

胴体、主翼の日の丸の周りに白い帯
を描いて本土防空の任務を示す目印
とした。1万呎のB29を墜とすには15
~20分くらいの短時間で上昇、接近出
来る性能が要求されたが、40~50分か
かってしまい、高度維持も難しく、失
速して一気に数千呎も落下してしま
う。高い高度の戦闘能力も6千呎限度
の設計。B29には対抗出来なかった。

源田 實(げんた・みのる)

明治37(1904)~平成1(1989) 広島県生
まれ。海軍大佐。真珠湾攻撃の作戦計画
を立て、「海軍航空の神様」と云われた。
戦後航空自衛隊空将、航空幕僚長。昭和
37年参議院議員(当選4回)

ロケット機「秋水」

20年7月7日、日本の航空史上初のロ
ケット機秋水(胴体800*₀、頼1名)の試
験飛行が行なわれたが墜落し失敗。

▽B29への特攻第1号

見田義雄伍長が「鍾馗」を体当り

▽B29は二通りの方法で来襲

▽100機前後の大編隊で高高度昼間爆撃

中島飛行機武蔵製作所を5回

名古屋の三菱重工発動機製作所を2回

航空機工業壊滅を狙って心臓部を集中爆撃

▽夜の空襲は1機か2機 下町に焼夷弾投下

●20年元日も2機のB29来襲で明けた

▽日本の国民にとって戦争は全て外地

B29が定期便のようにやって来てから

戦争の悲惨さ 戦局の厳しさを実感

▽宮中の「四方拝」も天皇は軍服姿

御文庫の庭に畳1枚敷いて急拵えの場で

四方拝

宮中に歴代伝わる祭事の中でも、特に重要な元日の祭事。篝火のたかれた神嘉殿の前庭に、金屏風をめぐらせた御座で、天皇が伊勢神宮をはじめ天地、四方の神々、山稜を拝して、その年の災いをはらい、国家の隆昌と皇室の安泰を祈られた。

..... 年頭の御題「社頭寒梅」に

風寒き 霜夜の月に 世をいのる

ひろまへ きよく 梅かをるなり

▽「霜夜の月」は 厳しい戦況

「梅香る世の平安」を 祈られた

▽1月6日 内大臣木戸幸一に

「重臣たちの戦局に対する意見を聴きたい」

●B29は無敵、憎らしいほど強かったが...

▽基地防空部隊は 上昇速度に 難点はあったが

戦闘機の特徴を生かして よく 戦った

▽B29は 19年年末までに

撃墜 被弾しての不時着で

150機を失い 891人の戦死者

▽終戦までに

撃墜 破壊されたB29は 414機

富塚 清(とみか・きよし)

明治26(1893)～昭和63(1988)千葉県生まれ。東京帝大工学部・航空研究所教授を務め、戦後明大、法政大教授。著に「ある科学者の戦中日記」

「戦中日記」から(昭和19. 12. 31)

ひと眠りしたら、またウーだ。「除夜の鐘、今年はウーで代用哉」というのが、年越しの辞。

清沢 冽(きよさか・きよし)

明治23(1893)～昭和20(1945)長野県生まれ。中外商業新報、朝日記者を経て自由主義的な外交・政治評論で活躍。戦中日記「暗黒日記」は貴重な現代史資料

「暗黒日記」から(昭和20. 1. 1)

昨年から今晩にかけて三回空襲警報鳴る。日本国民は、いま初めて戦争というものを経験している。戦争は文化の母だとかいって、戦争を賛美して来たのは長いことだった。僕が迫害されたのは、反戦主義という理由からだった。戦争はそんなに遊山に行くようなものなのか。それをいま彼らは味わっている。それでも彼らが本当に戦争に懲りるかどうかは疑問だ。

木戸 幸一(きと・こういち)

明治22(1889)～昭和52(1977)東京生まれ。侯爵。維新の三傑・木戸孝允の孫。文相、内相を経て昭和15年内大臣。開戦前東条英機を首相に奏請したが戦争末期には倒閣、和平工作に尽力。A級戦犯で終身禁固刑になったが病気で仮釈放。「木戸幸一日記」は東京裁判資料に

日本の防空戦闘機

- ・飛燕(三式) 最高時速592km。ドイツのメッサーシュミットの液冷式エンジンを搭載、戦闘性能に優れた。
- ・屠龍(二式艦戦) 最高速度570km。胴体

…… 吉田師団長の日記から (昭和19. 12. 31) ……

此の二カ月間に敵を迎うること四十回、来襲敵機六百三十八機… 戦果 撃墜確実二十八機 (内十六機は特攻隊の体当りによる) 不確実二十四機… 我損害 戦死二十八名 (内特攻隊の体当り自爆十名) 戦傷十名…

此の如く、予期したる戦果を挙げ得ざりし主原因は科学技術の立遅れに存し、その欠陥を補う為に無理と知りつつ無理を強行せざるを得ざりき。右の戦果の半数以上は実に此の無理の強行により獲ち得たるものにして、全く涙なくして語るを得ず。

▽技術院総裁八木秀次も 1月議会で
科学技術の遅れを 率直に 詫びた。

「暗黒日記」から (昭和20. 1. 25)

昨日、技術院総裁八木秀次博士、議会で答弁して言った。—最近、必死必中ということが言われるけれども、必死ではなくて、必中であるという兵器を生み出すことが、われわれのかねての念願なのである。が、これが十分に活躍する前に、戦局は必死必中の神風特攻隊を必要とするに至ったことは、技術当局として慚愧にたえず、申し訳ないことと考える。

この答弁は議会で非常な感激を生んだ。泣いているものもあったという。

- B29の大きな損害は米軍首脳部を愕然とさせた
- ▽統合幕僚会議は20年1月 相次いで 重要な決定
- ▽1月20日 マリアナ基地の
B29爆撃兵団司令官 ハンセル准将を更迭
夜間焼夷弾攻撃 無差別爆撃論の ルメイ少将に
- ▽サイパン—東京の中間にある 硫黄島攻略
当初の作戦開始目標 (20年1月20日) が
ルソン作戦の関係で 遅れていた
- ▽護衛戦闘機の 発進基地獲得が 急務に
被弾故障機の 途中 不時着する 飛行場も必要
- ▽唯一無二の適地が 硫黄島
- ▽1月22日 「2月19日上陸作戦」を決定

トップの37^ミ機関砲が威力を発揮。

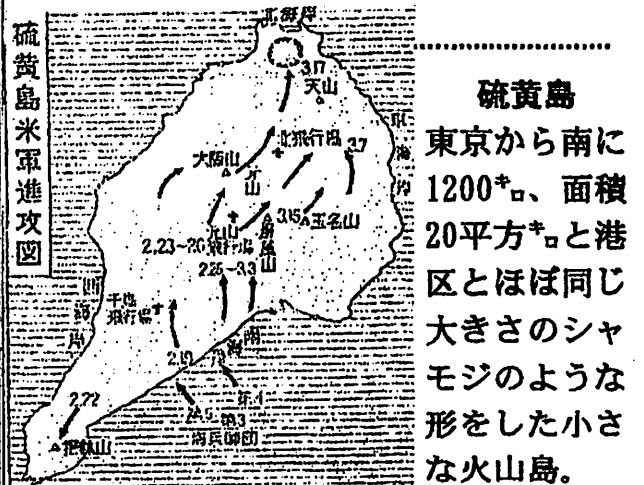
・疾風 (四機) 防弾装置が頑丈に造られ、最高時速687^キ。高度9千^フまではB29と互角に戦えた。

・雷電 海軍初の局地戦闘機で、時速612^キ。6千^フまで6分で到達し両翼の20^ミ機銃4挺のほか、独特の20^ミ斜銃がB29の死角からの攻撃になり撃墜に最も大きな戦果をあげた。

・月光 海軍の夜間戦闘機で時速507^キの難点があったが、胴体に上向き、斜下向きの20^ミ機銃を装備しB29編隊を後ろ下方から攻撃した。

八木 秀次 (やぎ・ひでつぐ)

明治19 (1886) ~ 昭和51 (1976) 大阪生まれ。東北帝大教授の大正15年、八木アンテナを開発、レーダー、テレビに広く採用される。大阪帝大教授、東京工科大学長を経て昭和19年技術院総裁。この間、電波兵器開発を指導。21年大阪帝大総長。28年参議院議員。31年文化勲章受章



明治24年「日本所領」を宣言、昭和15年東京府硫黄島村となり1029人の住民が暮らしていた。海軍は昭和8年千鳥ヶ原に飛行場を建設。18年9月に「絶対国防圏」の要衝となったことから島民の内地引き揚げが始まり、19年7月までに軍属として残った男子125人を除き引き揚げを終わった。

●栗林忠道中将(第109師団長)が19年6月8日着任

硫黄島に師団司令部

師団司令部は、父島要塞守備隊があつて通信補給施設の整っている父島にすべきだとの意見があつたが、栗林は、硫黄島が米軍の攻略目標になるとの確信から、硫黄島に置いた。

指揮官として率先戦場の焦点に立ち、灼熱の島で将兵と苦楽を共に、との考えからだった。

●島全体を活用の持久戦法—島全体を地下要塞に

▽島の端から端まで 長いところで 8.3km

狭いところは たった 800m

ほとんど平坦で 南端に 摺鉢山(標高169m)

▽栗林は 着任早々 縦深陣地構築を命じ

水際撃滅戦法に基づく 海岸配備を改めた

▽参謀本部が サイパン敗戦を教訓に

水際撃滅戦法を否定し 後方配備を命ずる

「島嶼守備要領」を通達したのは 8月19日

島嶼守備要領

第三 主陣地帯ノ前縁ハ…敵ノ砲爆撃ニ依リ
損害ノ減少ヲ図ル等ノ為海岸ヨリ適宜後退シ
テ選定スルヲ可トス

第九 …不準備躁急ノ大逆襲ハ昼夜ヲ問ワズ
通常甚大ナル損害ヲ招キ 防禦全体ノ指導ヲ
危殆ニ瀕セシメ或ハ将来ニ於ケル攻撃ヲ不可
能ナラシムルヲ以テ 之ヲ慎ムヲ要ス

●環境は劣悪そのもの、容易ではなかった

▽至る所で 火山の噴煙が噴き出し

どこへ行っても 硫黄ガスの臭い

▽水が 決定的にないことが 将兵を苦しめた

川も湧き水もなく 雨水以外は 飲料水ゼロ

▽陸軍1万7千 海軍5千の将兵が 充満

▽少しでも 傾斜があれば その下に溜め池

硫黄の蒸気のしたたり 木の葉の露も 集めた

▽1日1人当たり 水筒1本に制限

▽野菜を栽培しても 硫黄分が混じるためか

必ず 下痢に襲われ 乾燥野菜に頼るしか

栗林 忠道(くりばし・ただみち)

明治24(1891)～昭和20(1945)長野県生



まれ。陸軍中将。カナダ公使館付武官、米国駐在を経て、昭和8年から騎兵連隊長、陸軍省馬政課長と騎兵関係を歩む。「愛馬進軍歌」を作詞、「暁に祈る」も栗林の隠れた作品と云われる。第23軍参謀長、留

守近衛第2師団長を経て、19年5月第109師団長。硫黄島で戦死し、死後大将

愛馬進軍歌 昭和14年

詞 久保井 信夫 曲 新城 正一

国を出てから 幾月ぞ
ともに死ぬ気で この馬と
攻めて進んだ 山や河
とった手綱に 血が通う

昨日陥した トーチカで
今日は 仮寝の高いびき
馬よぐっすり 眠れたか
明日の戦は 手強いぞ

暁に祈る 昭和15年 松竹映画「暁に祈る」主題歌

詞 野村 俊夫 曲 古関 裕而

ああ あの顔で あの声で
手柄たのむと 妻や子が
ちぎれる程に 振った旗
遠い雲間に また浮かぶ

ああ 堂々の 輸送船
さらば祖国よ 栄えあれ
遙かに拝む 宮城の
空に誓った この決意

ああ 軍服も 髯面も
泥に塗れて 何百里
苦勞を馬と 分け合って
遂げた戦闘も 幾度か

●徹底した地下洞窟陣地の構築を指示

▽250*₀爆弾 戦艦主砲の直撃弾にも 耐えられる

▽北地区の師団司令部は 深さが 地下25₀ 尺

全長60₀ 尺 天井コンクリートの厚さは 3₀ 尺

▽元山 島中央部の 主要陣地には

二層 三層の地下壕 摺鉢山も三層に

▽海岸には 半地下式 コンクリ製トーチカを配置

トーチカ相互は 地下で連結

▽島を一周する 地下道も設備

随時随所に 敵を背後から 攻撃出来るように

▽多田実(元満蒙新報政治部長・海軍兵科3期予備学生)

「海軍学徒兵、硫黄島に死す」

学徒出陣の海軍学徒兵 183人戦死の島

●幹部からは「敵上陸前に戦闘力を失ってしまう」

▽反対の声も出たが 栗林は

「砲爆撃で犬死にするために、この島へ

来たのではない」決して 妥協しなかった

▽栗林の 見事な生き方は

いつの世にも 何が一番大切かを 教えている

▽日本陸軍の弊害は

司令官は参謀任せ 威張っているだけ

参謀は 命令さえ出しておけば

その通りになるはずと 前線を見なかった

▽ノモンハン ガダルカナル

インパール みんな そうだった

●硫黄島は「要塞の島」に変貌

▽総延長18*₀余りの 地下壕が完成

▽火砲230門 戦車23台

弾薬30万発 食糧も75日分の備蓄

▽栗林の戦闘計画は「とにかく地下で戦う」

兵士は みんな 地下に入れ

迫撃砲 対戦車砲 重機関銃も 地下洞窟陣地に

▽栗林の ただ一つの 心残りは

摺鉢山-元山の地下道路が 未完成だったこと

状況に応じ 随時 兵力移動 背後から攻撃も

●2月16日、米軍の硫黄島攻略作戦始まる

▽艦船800隻 航空機1600機で 猛烈な砲爆撃

多田は「言語に絶する苦役」

ツルハシ、モッコ、スコップと、原始的な用具で掘り進めたが、たちまち猛烈な硫黄の熱気が噴き出し地下10₀ 尺を超えると、地熱は40度、50度に上昇、地下足袋のゴム底さえ溶けた。禪一つで防毒マスクをかぶっても、1回の作業時間はせいぜい5分。5人1組で一昼夜掘って1₀ 尺掘れば良い方で、元気な兵隊でも半日作業をすると、後の半日は使いものにならない。

兵隊は心身共に疲労、悪性下痢や栄養失調で病人は常に4千人を超えた。自殺者も出たし、「自傷」といって、内地送還を狙って自分の銃で自分の足を撃ったのがばれ、軍法会議で銃殺刑になった者もいた。

●栗林のリーダーシップ

それでも将兵が「我等は各自敵十人を殲(お)さざれば死すとも死せず」、「我等は最後の一人となるもゲリラに依って敵を悩まさん」と「敢闘の誓い」を定めて団結したのは、栗林の優れたリーダーシップにあった。

栗林は、「指揮官陣頭」、「軍紀肅正」、「上下一体」の3項目を方針に、兵隊同様水筒1本で島内を限なく歩き、築城作業を自分の目で確かめ指導した。部下は「閣下が誰よりも一番、島の様子をご存じだった」と回想している。

また将校にも「将校は兵の食事に満幅の注意を払ふを要す。将校の分のみ別に食事し、兵の給食が如何なる状態に在りやを無関心なるが如きこと断じてあらざるを要す」と、細かな指導をして兵隊を心服させた。

- ▽3日間で 爆弾124ト、ロケット弾2254発 艦砲射撃で 3万8550発を撃ち込んだ
- ▽摺鉢山は 7分の1がなくなり 島全体が爆煙に包まれ 米軍も「5日間で占領」
- ▽日本軍は 地下で じっと 耐えていた

- 19日早朝、海兵3個師団7万5千が硫黄島沖に
- ▽午前8時半 第一波上陸用舟艇が 南海岸に いつもと違って 小銃弾1発 飛んでこない
- ▽栗林の作戦は「上陸してから叩く 上陸するまでは 砲門は 開くな」
- ▽午前11時半頃には 1万人が 上陸を終え 海岸は 兵士と車両の群れで 真っ黒
- ▽栗林が 待っていたのは その瞬間だった 一斉射撃が始まり 弾薬 ガソリンに引火 爆発
- ▽噴進砲(叩っ砲)70門も 密集の敵攻撃には 絶好 戦車28台が擱座 慌てふためき ナマ電報 「負傷者続出、早く病院船を回せ」
- ▽夕方には 橋頭堡を確保 3万人が上陸したが 死傷者2400人 大きな損害を出した

●摺鉢山が硫黄島攻防の焦点に

- ▽米軍は 連続7日間 最大の砲爆撃を集中
- ▽栗林にとって 唯一 作戦計画が狂ったのは 海軍砲台が 上陸前(18日)に 敵艦船を砲撃 14号砲2門 12号砲8門を 破壊されたこと
- ▽守備隊1700人も全滅 米軍は23日朝 占領

第二次大戦「最大の激戦」の象徴

23日午前6時20分、シュライヤー中尉と4人の部下が、長さ6mの鉄パイプに小さな星条旗を結びつけて山頂に立てると、山麓、海岸の海兵隊員から「ワー！」と歓声があがり、海上の輸送船一斉に汽笛を鳴らした。しかし、海兵隊のカメラマンがカメラを構えた瞬間、2人の日本兵が手榴弾を投げ、斬り込んできた。AP通信特派員ローゼンソールによって、縦1.4m、横2.4mの大星条旗を翻す写真が撮られたのは、2時間後に日本兵の掃討が終わってから。

この写真は25日付全米朝刊各紙の1面を大きく飾り、米国民を感動の渦に巻き込んだ。戦時

種村 佐孝(たねむら・さこう)

明治37(1904)～昭和41(1966)三重県生まれ。陸軍大佐。昭和19年7月参謀本部戦争指導班長。20年8月第17方面軍参謀となり、シベリア抑留を経て25年1月帰国。著に「大本营機密日誌」

…… 米艦載機、初めて本土空襲 ……………

種村佐孝戦争指導班長は「大本营機密日誌」(聊20. 2. 16)に、こう書いている。「昨夜来敵機動部隊が本土に接近し、本朝七時から午後四時にわたり艦載機十波約二〇編隊、延にすると一、四〇〇機が関東及び東海地区に来襲し、主として飛行場及び港湾を攻撃した。機動部隊は五群、空母十五を基幹とするものようであった。

この大機動部隊が帝都の玄関先で、猛威を振う間、これに一矢も報いるものもない。国民の戦意を喪失せしむるもの、これより甚だしきはなかった。今後の帝都の物的、国力戦力の激減が予想せられた」

—— 地上対地下の戦闘に ——

米軍は夜になると、日本軍得意の夜襲攻撃に備えたが、日本軍は来ない。栗林は「血気の勇」を厳しく戒め、小人数の部隊で、手薄な弾薬、ガソリン集積所だけを狙って攻撃させた。

日本軍は砲爆撃が続いている間は、洞窟内に息を潜め、敵が接近すると、射撃陣地に飛び出して攻撃した。2、3発撃つと、迫撃砲、ロケット砲を地下に担ぎ込み、坑道を通って移動、別の陣地から攻撃した。米軍が1日に前進出来たのは千人以上の死傷者と引き替えに100mか200m。米軍司令部は、「上陸3日間で1分間に喪失3名。世界で一番攻めにくい島だ」と発表した。

献金は爆発的な記録を作り、ワシントンの「無名戦士の墓地」には、海兵隊員が山頂に星条旗を押し立てている銅像が建てられた。

▽しかし 栗林の本格的抵抗は 中央台地に移して
▽米軍は 26日には 予備の海兵第3師団も投入

●ルメイは25日、大雪の東京に「実験的空襲」

▽軍需工場への 昼間 高高度爆撃から

大都市焼夷弾攻撃に 方針転換させる

▽無差別爆撃で 453トンの焼夷弾 2万戸被災

▽ルメイは「日本の大都市は

1700トンの程度の焼夷弾で壊滅出来る」と確信

●3月10日の東京大空襲は空前の大火災に

▽中小家内工業地区 木造家屋密集の 下町を目標に

▽334機が 2千トンの19万発の焼夷弾

▽先頭集団は 油脂性のナパーム焼夷弾を投下

非常に 点火しやすく 高熱で 長時間燃える

▽「火の壁」を作っておいて M69焼夷弾

▽親爆弾が空中で分解 38本または76本の

小型焼夷弾が バラバラ 降ってくる

地上からは「火の雨が降るように見えた」

▽下町は火の海 一瞬に 四方を炎で囲まれ

市民は 逃げ場を失い 悲惨だった

▽死者8万8793人(市防空本部調べ) 10万以上とも

焼失26万7171戸 被災者100万人以上

●硫黄島では孤立無援の激戦が続いていた

▽2月28日 豊田副務連合艦隊長官から 激励電

「犠牲になれ」と云う非情な電報

「…翻って決戦兵力の錬成並びに敵の次期進攻予想地点の防備は概ね四月末を以て完成の域に達する見込みにして、今後、確信を以て作戦し得ると否とは一にかかりて硫黄島持久反撃作戦の如何に存す。…潜水艦の全力及び一部航空機の外に投入し得ざるを遺憾とするも現下の痛烈なる全般作戦の要請に応えあくまで沈毅敢闘せんことを希望す」

…… フォレストル海軍長官も激励 ……

勝利を確信して、観戦に来ていたフォレストルは、星条旗が翻った瞬間、感激してスピーカーで海兵隊員に呼び掛けた。「マウント・スリパチは陥落した。頑張れ、諸君。あとたった数日で全島を占領出来る」

—— 驚くべき米軍の飛行場修復力 ——

米軍は上陸翌日の20日、千鳥飛行場を占領すると24日から修復作業に入り、まず不時着・緊急避難の場を確保した。そして3月12日には早くも爆撃機用滑走路を完成させた。

—— 虚をつかれた防空陣 ——

9日夜10時半関東地方に警戒警報が発令されたが、少数のB29が爆弾も落とさずに去ったため間もなく解除になった。実際は、日本のレーダー攪乱を狙って大量の銀箔を蒔きにきたものだった。しかも、本土沿岸のレーダーは、折からの20m以上の強風で、ほとんど正常に作動せず、大編隊が続々と近付いているのに全く気付かなかった。

第1弾が江東区木場に投下されたのが10日午前零時8分、いきなり空襲警報が鳴った15分には、すでに各所から火の手があがっていて、烈風に煽られてたちまち燃え広がった。

豊田 副務(とよだ・せむ)

明治18(1885)～昭和32(1957)大分県生まれ。海軍大将。昭和19年5月連合艦隊司令長官となり、20年5月軍令部総長

「竹槍で戦え」

捕虜になり生還した兵隊の話では、日本機が補給品を投下したので、決死隊を募って回収したが梱包の中身はわずかな雷管と竹槍だけ。「竹槍で

▽3月4日には 残存兵力4100人
前線指揮官の3分の2が戦死 火砲も壊滅

- 3月17日「帝国海軍万歳、勝利を確信す」
▽海軍司令部は 暗号書を焼却 平文で打電
▽栗林も この日 訣別電報を 書き終わり
18日午前零時を期して 打電を命じた

栗林の訣別電報

戦局ツヒニ最後ノ関頭ニ直面セリ。…敵来攻以來、麾下將兵ノ敢闘ハ真ニ鬼神ヲ泣カシムルモノアリ。…今ヤ弾丸尽キ、水涸レ、戦ヒ残レルモノ全員、最後ノ敢闘ヲ行ハントスルニ当リ、シミジミ皇恩ノ忝サヲ思ヒ、粉骨碎身、マタ悔ユル所ニ非ズ。タトヒ魂魄トナルモ誓ッテ皇軍ノ捲土重来ノ魁タランコトヲ期ス。ワガ祖国ノ必勝ト安泰ヲ祈念シツツ、永ヘニ御別レ申シ上グ。終リニ左記駄作、御笑覧ニ供ス。

国の為 重きつとめを 果し得て
矢弾尽き果て 散るぞ悲しき
仇討たて 野辺には朽ちじ 兵はまた
七度生れて 矛を執らむぞ

- 大本営は21日、「硫黄島玉砕」を発表
▽栗林以下 北地区の将兵は まだ 戦っていた
▽米軍は マイクで「栗林閣下、出て来てください。
戦争はもう終わりました。兵隊を無理に殺さないで下さい」と 呼び掛けた
▽北東海岸では 第26戦車連隊長 西竹一中佐が
部下15人と共に 断崖に 追い詰められていた
▽ロサンゼルス・オリンピック 馬術の金メダリスト
「バロン西、出て来て下さい」の 呼び掛けに
西は21日頃 笑って 腹を切ったと云う
▽23日 父島の呼び出しに応え
「父島の皆さん、さようなら」を最後に 通信途絶
▽栗林は 26日未明 残存将兵400人と出撃
負傷すると 幕僚に 拳銃で撃つよう 命じた
▽海軍通信参謀の 腹巻からは
海軍部隊指揮官 市丸利之助少将の
「ルーズベルトニ与フルノ書」

戦えと云うのか、余りにむごいではないか」と泣いたと云う。

もうこの頃には小銃の充足率は5割程度。本土決戦に備えて陸軍150万、海軍40万の大動員を決めても、小銃さえ満足に渡せなくなっている日本軍の実情を物語っている。

西 竹一(にし・たけいち)

明治35(1902)～昭和20(1945)鹿児島県生まれ。陸軍中佐。明治の外相西徳二郎の長男。男爵。昭和7年中尉の時、ロサンゼルス五輪馬術に日本人選手として初参加、大賞典障害飛越競技に優勝。第26戦車連隊長として戦死。死後大佐

市丸 利之助(いちまる・りのすけ)

明治24(1891)～昭和20(1945)佐賀県生まれ。海軍少将。予科練初代部長として1期生の教育に当たり予科練育ての親。昭和19年8月、第27航空戦隊司令官となり硫黄島で戦死。死後中将

……「ルーズベルトニ与フルノ書」……

…日本ガ「ペルリー」提督ノ下田入港ヲ機トシ広ク世界ト国交ヲ結ブニ至リシヨリ約百年ノ間日本ハ国歩艱難ヲ極メ自ラ慾セザルニ拘ラズ、日清、日露、第一次欧州大戦、満州事変、支那事変ヲ経テ不幸貴国ト干戈ヲ交フルニ至レリ。貴下ハ真珠湾ノ不意打ヲ以テ対日戦争唯一宣伝材料トナスト雖モ日本ヲシテ其ノ自滅ヨリ免ルハタメ此ノ挙ニ出ツル外ナキ窮境ニ迄追ヒ詰メタル諸種ノ情勢ハ貴下ノ最モヨリ熟知シアル所ト思考ス。

…卿等ハ既ニ充分ナル繁栄ニモ満足スルコトナク数百年來ノ卿等ノ搾取ヨリ免レントスル是等憐ムベキ人類ノ希望ノ芽ヲ何ガ故ニ嫩葉(わかひ)ニ於テ摘ミ取ラントスルヤ。只東洋ノ物ヲ東洋ニ歸スニ過ギザルニ非ズ

▽市丸が 死に臨んで ルーズベルトに
「自分の真意を伝えたい」と 準備したもの
▽「これは本戦闘の終りに当り、
貴下にする最後の一言である」の 書き出しで
筆で 海軍用箋8枚に 日英両文で
▽書簡の原本は 現在 アメリカ海軍兵学校の
アナポリス記念館に 保存されている

●硫黄島36日間の戦いは、米軍が反攻に出たから、米軍の損害が日本軍を上回った唯一の戦闘

▽日本軍戦死 1万9900

捕虜になって生還した者 1033

▽米軍戦死 6821 戦傷 2万1865

▽硫黄島には 2251機のB29が 不時着

2万4761人の 搭乗員の命が 救われた

▽硫黄島からは 長距離戦闘機P51が

B29援護と共に 関東・東海を荒らし回る

▽関門海峡には 27日 機雷1千個投下

「海の日本封鎖」も 始まった

●昭和20年に入ると、米軍のルソン島進攻作戦

▽1月6日 リンガエン湾を艦砲射撃

9日には 5個師団 20万が上陸

▽「レイテ戦こそ今次戦争の天王山」と

言い続けてきた 小磯国昭首相も

元日の年頭放送で「比島全域が天王山」

▽とても 決戦出来るような 状態ではなかった

▽山下奉文大将率いる第14方面軍は 総勢28万

数こそ 遜色ないが 戦車 大砲 小銃と

質でも 量でも 次元が 基本的に違っていた

▽精鋭2個師団と 多くの軍需品を レイテに送り

航空支援も 後方補給も 望めない

▽加登川幸太郎中佐(第35戦隊)は「戦闘というよりも

一種の持久だった。拠点といっても陣地もなく、

ただその辺りで生きていくというだけだった」

●「もはや敗戦は必至」の見方、「終戦による事態收拾を急ぐべきだ」の動きが、ようやく支配層、有識者に

▽4つほどの流れ みんな どこかで繋がっていて

中心にいたのは 元首相の近衛文麿

ヤ。卿等何スレゾスクノ如ク食欲ニ
シテ且ツ狭量ナル。…

—— キング元帥(精悍機眼)の言葉 ——

硫黄島の攻略以後、同島に不時着して
救助された人命だけでも、同島の攻略
に当って払った犠牲より多かった。

小磯 国昭(こいそ・くにひこ)

明治13(1880)～昭和25(1950)栃木県生
まれ。陸軍大将。陸軍次官、朝鮮軍司令
官歴任。昭和13年予備役。拓務相、朝鮮
総督を経て19年7月首相となるが20年4
月総辞職。A級戦犯で終身禁固刑

山下 奉文(やました・ともむね)

明治18(1885)～昭和21(1946)高知県生
まれ。陸軍大将。昭和16年第25軍司令官
となりシンガポール攻略。19年9月比島
第14方面軍司令官。戦後、マニラで刑死

近衛 文麿(このゑ・ふみまろ)

明治24(1891)～昭和20(1945)東京生ま
れ。公爵。貴族院議長を経て昭和12年6
月首相。直後に支那事変が勃発、早期収
拾に失敗。15年7月第2次内閣組織、日独
伊三国同盟を締結。16年7月松岡洋右外
相を更迭、第3次内閣を組織するも日米
交渉妥結の展望を失い、10月総辞職。戦
後A級戦犯に指名され服毒自殺

—— 米国戦略爆撃調査団 ——

1944年11月、ドイツ爆撃の効果を研
究し、対日戦に生かすため、陸軍長官
により設置された。日本の敗戦で、ト
ルーマン大統領は調査団に日本空襲
の効果を研究、報告するよう命じた。
日本の軍事計画、戦時経済、降伏受諾
までの経緯など、政財界人、軍人など
700人以上に証言を求め「太平洋戦争
報告書」にまとめた。

▽近衛は 敗戦後の11月(自衛12月16日)

米国戦略爆撃調査団の質問に 答えて

「戦争終結に一番熱心に奔走したのは、現在の
外相吉田茂あたりではないでしょうか」

吉田と近衛の仲

吉田は当時、近衛より13歳年上の66歳。
近衛が「吉田君、吉田君」と信頼するほど、
近衛の最大の協力者だった。

「大胆率直さは吉田の地」と云われたくらい
気の強い吉田。

近衛が日独伊三国同盟

を結ぶと、吉田は反対して絶縁状まで送った。
しかし、開戦と共に「この戦争を終わらせるのは
近衛しかない」と仲直りし、ミッドウェー敗戦
直後の17年6月、終戦工作に近衛をスイスに派遣
するよう、内大臣の木戸に申し入れている。

吉田のグループは、殖田俊吉、岩淵達雄、馬場恒
吾、皇道派の陸軍中将小畑敏四郎、樺山愛輔と元
老西園寺公望の秘書役で、近衛、木戸とも友達づ
きあいの原田熊雄など。



吉田 茂(よしだ・しげる)

明治11(1878)～昭和42(1967)東京生まれ。昭和3年田中内閣外務次官となり駐伊・駐英大使を経て14年退官。日米開戦に反対し開戦後も近衛らに和平工作を働きかけ20年4月憲兵隊に逮捕される。戦後、東久邇・幣原内閣外相。21年5月自由党総裁となり首相。23年自民党総裁。26年サンフランシスコ講和条約に首席全権として調印。29年退陣まで5度の内閣を組閣、解散を繰り返し「ワンマン宰相」と呼ばれた。38年引退後も保守本流の元老として政界に大きな影響力を持った。牧野伸顕の女婿。国葬

殖田 俊吉(うゑだ・しゅんきち)

明治23(1890)～昭和35(1960)大分県生まれ。大蔵省に入り昭和2年田中義一首相秘書官となり、吉田と知り合う。戦後吉田内閣行政管理庁長官、法務総裁

岩淵 達雄(いわぶち・たつお)

明治25(1892)～昭和50(1975)宮城県生まれ。読売、国民、東京日日の記者を経て政治評論家。著に「政界五十年史」

馬場 恒吾(ばば・つねご)

明治8(1875)～昭和31(1956)岡山県生まれ。国民新聞編集局長を退社後、政治評論で活躍。戦後、読売社長となり読売争議を収拾。日本新聞協会の初代会長

樺山 愛輔(かばやま・あいすけ)

慶応1(1865)～昭和28(1953)鹿児島県生まれ。海軍大将樺山資紀の長男。アメリカに留学し、同盟通信の前身・国際通信社を設立。日米協会会を創立し、戦後は会長を務めるなどグルー駐日大使をはじめアメリカに友人が多かった

●海軍では、高木惣吉少将が米内光政海相、井上成美次官の特命で終戦工作

▽「終戦工作最大の難事は、革命の危険を冒さないで
陸軍を説得することだった」

▽高木は 19年秋から 毎週1回

重光葵外相秘書官の加瀬俊一

陸相秘書官の松谷誠大佐

内大臣秘書官長の松平康昌と 情報交換

▽松谷は 戦争指導班長時代 サイパン放棄決定に

「日本の負けであり、戦争収拾の方向へ向かえ」

意見書を出して 東条英機の激怒を買い

支那派遣軍参謀(7月3日)に 追われたが

11月に 陸相秘書官として 戻っていた

…… ここまで来ても楽観的な統帥首脳 ……………

高木が、及川古志郎軍令部総長に戦局の見通しを尋ねた(20年1月26日)ところ、「私は重体であるが、危篤とは見ない」。ルソンの戦いについても梅津美治郎参謀総長から聞いた話として「敵の動員し得る陸上兵力は、洗い浚い出したところで十個師団。我方の在比兵力は五個師団で、そう悲観することはない。戦局は寧ろ思う壺で、我方は東西山麓の堅固なる陣地に立て籠もったのだから、敵が中央平地を真っすぐに南下出来ようとも思われぬ」。

日本軍には、堅固どころか掘るべき陣地もなく、米軍は中央平地を突破し、クラーク空軍基地に突入しようとしていた。高木は「悪いことは信じまいと云うのが、彼らの態度だった。及川も梅津も、実は、自分たちの楽観論を信じているのではなかった。部下に対して、外部に対して、そして天皇に対して、楽観論を説かねばならないと、彼らは信じているのだった」。

●加瀬の呼び掛けで出来た「三年会」

「日本の知性」を集めて

加瀬は19年暮れに箱根のフジヤ・ホテルで作家の山本有三と会った際、敗戦の避けられない情勢を話して、「平和回復の促進と戦後の国内の混乱を防ぐには、どうしたらよいか。それを研究する愛国的な思想家グループを作りたい」。こう訴えたところ、近衛と一高同期で、近衛からいろいろ聞いている山本もすっかり共鳴し、作家仲間の志賀直哉に電話。志賀は武者小路実篤(傑)を誘った上で、谷川徹三(徹三)に人選を相談した。

谷川は15年、当時海軍省調査課長をしていた高木の「海軍に助言してほしい」との依頼で、「思想懇談会」を作って幹事をしていたから、その仲間から選んだのが東京帝大教授の和辻哲郎、田中耕太郎、富塚清、一高校長安部能成。メンバー9人。文化勲章5人、文化功労者1人。

原田 熊雄(はらだ・くまお)

明治21(1888)～昭和21(1946)東京生まれ。大正15年元老西園寺公望の秘書。昭和6年貴族院議員。西園寺が死去した15年まで側近として政界情報を収集、「西園寺公と政局」を記録している

高木 惣吉(たかぎ・そうきち)

明治26(1893)～昭和54(1979)熊本県生まれ。海軍中将。昭和19年3月教育局长。9月から「軍令部出仕兼海大研究部員」の肩書きで密かに終戦工作に当たる。著に「自伝的日本海軍始末記」

米内 光政(まい・みつまさ)

明治13(1880)～昭和23(1948)岩手県生まれ。海軍大将。連合艦隊長官、海相を経て昭和15年1月首相。日独伊三国同盟に反対、陸軍の協力が得られず7月総辞職。19年7月現役に復帰、小磯、鈴木内閣海相として戦争終結に尽力

井上 成美(いのうえ・しげよし)

明治22(1889)～昭和50(1975)仙台市生まれ。海軍大将。軍務局长、海兵校長。昭和19年8月海軍次官となり終戦工作

重光 葵(しげみつ・あきら)

明治20(1887)～昭和32(1957)大分県生まれ。駐ソ・駐英大使を経て昭和18年東条内閣外相、小磯内閣に留任。A級戦犯で禁固7年。27年改進黨総裁となり鳩山内閣外相。日ソ国交回復、国連加盟実現

加瀬 俊一(かせ・としかず)

明治37(1904)～平成16(2004)千葉県生まれ。昭和15年松岡洋右外相秘書官。開戦時は北米課長、18年重光外相秘書官。戦後国連大使、ユーゴスラビア大使。著に「日本外交の主役たち」

▽1月12日 第1回会合を

麴町三年町の 外相官邸で開く

▽会の目的を「日本の将来を考えること」

志賀が「残念会にならねばよいが…」

志賀の手紙(聊20, 1. 26)

志賀は、東村山の病院に入院している次女寿々子の夫に手紙を書いている。

「…戦局の進み方によっては病院そのものがいつまで続くかというような事にも不安を感じます。フィリピン決戦の結果によっては、そういう時が案外早く来るかも知れぬという話、二週間程前政府の多少責任ある人(聊のこと)からきいて、心配しています」

「三年会」での重光の話

「軍も満州事変だけでやめておけば、全く満点でした。だが、あそこでやめられなかったというのが歴史的必然というものでしょうね。北支だけなら、まだましだった。あそこまでは認めようと、イギリスもいったんですからね。だが、そこで留まれなかった。あれからはまさしく乱心者です。その乱心者を叩きつぶさねば…とアメリカ側は思っているわけです」

…… アメリカの「天皇観」(富塚の「戦中日記」から) ……

重光氏は陛下のことにふれ、彼はしょっちゅう、お召しにあずかり、いろいろのことを聞かれるという。実に戦局を憂えておられる。その大御心を国民の心としたい。それは平和的なお心であると。アメリカの「ライフ」という雑誌に陛下のことを“The last supporter of peace”と書いてある由。また観兵式の写真説明には“The prisoner of his own power”とも書いてあるという。終りのは和辻氏の話。

●「天皇のお声がかりが一番」

▽富塚が 谷川に 呼ばれて行くと

「この調子では国内がやがて大混乱になるだろう。その時の用意をしておこう」

松谷 誠(まつたけ・せい)

明治36(1903)～平成10(1998)福井県生まれ。陸軍大佐。昭和18年参謀本部戦争指導班長。支那派遣軍参謀転出後、陸相秘書官。戦後、陸上自衛隊北部方面總監

松平 康昌(まつだいら・やすまさ)

明治26(1893)～昭和32(1957)福井県生まれ。侯爵。明大教授を経て昭和11年内大臣秘書官長。戦後、宮内省式部官長

東条 英機(とうじょう・ひでき)

明治17(1884)～昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大将。昭和16年10月陸相兼任のまま首相。19年2月参謀総長も兼務したがサイパン陥落で7月総辞職。戦後ピストル自殺を図り未遂。A級戦犯で刑死

及川 古志郎(おいかわ・こしろう)

明治16(1885)～昭和33(1958)岩手県生まれ。海軍大将。横須賀鎮守府長官を経て昭和15年9月近衛内閣海相。海上護衛司令長官を経て19年8月軍令部総長

梅津 美治郎(うめづ・よしじろう)

明治15(1882)～昭和24(1949)大分県生まれ。陸軍大将。陸軍次官を経て昭和17年関東軍司令官。19年7月参謀総長となりA級戦犯で終身禁固刑。拘置中病死

山本 有三(やまもと・ゆうぞう)

明治20(1887)～昭和49(1974)栃木県生まれ。作家。昭和22年参院議員。40年文化勲章。代表作「真実一路」「路傍の石」

志賀 直哉(しが・なおや)

明治16(1883)～昭和46(1971)宮城県生まれ。作家。明治43年武者小路実篤らと「白樺」を創刊。昭和24年文化勲章。代表作に「暗夜行路」「小僧の神様」

▽結局「日本としては天皇を中心に国を立て直して行くべきではないか。ロシアとアメリカの間をうまく泳ぐことも必要、急いではいけない。また、どうやるにしても、反対はある。一億玉砕を主張するものもある。そういうのをどうして押えて行くか？ 天皇のお声がかりが一番だろうとなった」(「朝日」)

▽高木「最後は陛下に決断してもらう以外に、陸軍を抑える切札はない」重光も「最後は鶴の一声」

●政局を動かす大きな力を持っていたのは重臣

▽近衛は 19年9月から 毎月第二火曜に
岡田啓介 若槻礼次郎 平沼騏一郎と
目白の近衛別邸に集まり 意見交換

●吉田は、近衛の「決起」を促す

▽1月6日 岩淵 小畑と 近衛を訪ね
「近衛内閣を作って、終戦に持って行くこと。その第一歩として、近衛から天皇に、和平を急ぐ必要があることを進言すべきだ」
▽近衛は 上奏には 賛成の様子だったが
陸軍相手の組閣には 簡単には 腰を上げない
▽吉田は 原田も訪ね 木戸に 働きかけさせた

●昭和天皇もこの日、木戸に重臣との会合希望

▽「比島の戦況は愈々重大となるが、其の結果如何によりては重臣等の意向も聴く要もあらんと思ふが如何」(「朝日」昭和20. 1. 6)
▽13日にも 催促されたが 木戸は慎重だった

「重臣拝謁は危険」

重臣拝謁は、開戦以来一度も行なわれていなかった。軍部から「和平論者」と見られており、その動きが表面化することは政治的影響が大きいだけでなく、憲兵の目も光っていた。

政治向きのことで拝謁を許されたのは、木戸は別として、首相、陸海軍の責任者と閣僚くらいのもの。そのため天皇は、常に水増しの戦果を聞かされ、戦局の厳しさも、正確には知り得ないような状態に置かれていた。

武者小路 実篤(むしゃのこうじ・さねあつ)

明治18(1885)～昭和51(1976)東京生まれ。作家。宮崎県に土地を入手、「新しき村」のユートピア運動を实践。昭和26年文化勲章。代表作に「友情」「愛と死」

谷川 徹三(たか川・てつぞう)

明治28(1895)～平成1(1989)愛知県生まれ。哲学者。法政大教授。文芸、美術、宗教、思想と広範な評論活動を行い、昭和38年同大総長。62年文化功労者

和辻 哲郎(わつじ・てつろう)

明治22(1889)～昭和35(1960)兵庫県生まれ。哲学者。京都帝大、東京帝大教授。昭和30年文化勲章。著に「古寺巡礼」

田中 耕太郎(たなか・こうたろう)

明治23(1890)～昭和49(1974)鹿児島県生まれ。東京帝大教授。昭和21年吉田内閣文相。参院議員。25年最高裁長官。35年国際司法裁判所判事。同年文化勲章

安部 能成(あべ・よししげ)

明治16(1883)～昭和41(1966)松山生まれ。一高校長、昭和21年幣原内閣文相。22年以来死去するまで学習院院長

岡田 啓介(おかだ・けいすけ)

慶応4(1868)～昭和27(1952)福井県生まれ。海軍大将。連合艦隊長官、海相を経て昭和9年7月首相。二・二六事件で襲撃され、九死に一生を得る。戦争中は東条内閣倒閣、和平推進に重臣の中心に

若槻 礼次郎(わかき・れいじろう)

慶応2(1866)～昭和24(1949)島根県生まれ。大正15年首相。金融恐慌で総辞職し、昭和6年再度首相となるが満州事変で8か月で総辞職。著に「古風庵回顧録」

▽吉田が しびれを切らして

小畑を 湯河原の近衛の所へやり せつかせた

▽近衛も ようやく1月30日 4重臣で集まり

「お上よりこの際、軍に対し戦争の見通しにつき

御下問ありて然るべし」と 木戸に伝えた

▽木戸は 軍部に対する下問には

「時機に非ず」と 消極的だったが

重臣拝謁には「考慮している」

木戸が考えた「寒中ご機嫌伺い」

この正月は、戦況の関係で新年参賀が取り止めに
なっていた。重臣には、寒中と暑中に陛下
のお見舞いに参上する慣習があった。

重臣拝謁を公然と実施すれば、軍部を刺激する
恐れがあり、新年参賀がなかったのだから、
せめて寒中お見舞いくらいは慣例通りしても
らう。その際せっかくだから、たとえ少ない時
間でも、陛下に難局に対する所信を直接話
して頂く。目立たないように、2月7日から重臣を
一人ずつ個別に招いて行なわれることに。

●軍部の警戒は嚴重だった

▽東京憲兵隊 陸軍省資料調査部は

近衛の別荘があり 政財界人が疎開して

往来の激しい 軽井沢 箱根

原田が住んでいて

吉田の別邸のある 大磯には

それぞれ 密偵チームを置いて 監視していた

●戦後日本の運命を決めた「ヤルタ会談」

▽2月に入ってから 海外電報は しきりに

「米英ソ三国首脳が秘密会談」と 伝えていた

▽会談が 2月4日から始まり

開催地が クリミア半島ヤルタとわかったのは

最終日の11日 共同宣言が 発表されてから

▽日本政府には 13日夕 宣言内容が届いた

▽誰もが まず探したのは 日本についての言及

▽「ドイツは三国で占領、これにフランスが加わる余
地を残す」「連合国による平和機構(國聯)創立会
議を四月二十五日、サンフランシスコで開く」

平沼 騏一郎(ひらぬま・きいちろう)

慶応3(1867)～昭和27(1952) 岡山県生
まれ。検事総長、枢密院議長を経て昭和
14年首相。A級戦犯で終身禁固刑

…… 松平秘書官長の話 ……

木戸は重臣拝謁を決めた後、松平に
語ったと云う。「あの人たちと会った
ところで、私と同一意見だ。彼らは和
平論者と世間から認められている。
内大臣たる私が彼らと会えば私が和
平運動に関係することになり、ひい
ては、陛下もその中に数えられ、陛下
を全くその反対勢力の中にとられて
しまったりしては、事が破れる。

ここしばらくは木戸は頑迷だ、戦争
継続論者だと思われてもよろしい。
今に解る時も来る。国家が救われ
ば、それでよろしいのである」

「大本营機密日誌」から(昭和20.2.7)

本日、憲兵司令官から参謀総長に対し
左のような報告があった。

「国内における和平策動者としては吉
田茂、樺山愛輔、原田熊雄等で、近衛文
麿、岡田啓介に連絡が密である。これ等
の方法はヴァチカンを通ずる者、在支
中立国人を利用せんとする者である」

国内はいよいよ騒然としてきたよう
である。

…… 日ソ中立条約 ……

16年4月13日、松岡洋右外相とスタ
ーリンの間で調印された。条約期間5
年で、21年に満了になる。延長しない
場合には、1年前に通告することにな
っていた。批准は4月25日だから、不
延長なら24日午後12時までには通告し
なければならない。

- ▽「日本」「アジア」の一字もなかった
- ▽4月25日を選んで 会議を開くのは
日ソ中立条約の変更を 示唆するのでは？
- ▽佐藤尚武駐ソ大使の電報は 23日届いた

…… 佐藤大使の報告は「素観的」だったが……

モロトフ外相は22日、機嫌よく佐藤を迎えて質問に答え、「日本に関することは不思議にも話題にのぼりませんでした。日本に対する方針には何の変更もない」と太鼓判を押した。

佐藤がホッとして「日本政府は延長を希望している」と告げると、「多忙のためにまだ研究していない」とはぐらかし、即答を避けた。

佐藤は「中立条約については日を改めて話そうと友好的だ」と報告してきたが、モロトフは2か月も経たない4月5日、佐藤大使にぬけぬけと中立条約不延長を通告した。

- ヤルタ会談では、重大な密約が交わされていた
- ▽「ソ連がドイツ降伏後の2、3か月後に対日参戦」
- ▽米統合幕僚会議の判断では
日本屈伏には 18か月を要し 死傷者100万
- ▽米国の立場は「最小の損害で最大の勝利をあげる
には、ソ連の対日参戦が最も望ましい」
- ▽スターリンは ハル國務長官訪ソの際(18年10月19日)
非公式に 対日参戦の意向を 表明していた
- ▽それを 確実なものにと迫る ルーズベルト
スターリンは 関東軍が 相次ぐ南方転用で
ほとんど 無力化していることを 知っていた
- ▽スターリンは この有利な立場を フルに利用
「南樺太・千島回復」をはじめ
中国の了解もなしに 旅順の租借権回復など
全ての条件を ルーズベルトに呑ませた
- ▽日本に対する「無条件降伏」も 再確認された
- ▽チャーチルが「条件付降伏を認めてはどうか」
- ▽米軍首脳部も「出血が避けられる」と 期待したが
ルーズベルト スターリンは 反対した
- ▽ルーズベルトは 4月12日 脳溢血で急死
密約を知っているのは 二、三の軍首脳に限られ
トルーマンも 大統領になって 初めて知った

佐藤 尚武(さとう・なほむね)

明治15(1882)～昭和46(1971)大阪生まれ。ベルギー大使、フランス大使を経て昭和12年林内閣外相。17年ソ連大使。戦後は参議院議員となり、24年議長

ヤルタの秘密協定書

三大国、すなわちソヴィエト連邦、アメリカ合衆国および英国の指導者は、ドイツが降伏し、かつヨーロッパにおける戦争が終結した後二カ月または三カ月を経て、ソヴィエト連邦が次の条件で連合国に与して、日本国に対する戦争に参加することを協定した。

一、外蒙古(韃靼斯坦)の現状は維持される。

二、1904年(明治37年)の日本国の背信的攻撃により侵害されたロシア国の旧権利は次のように回復される。

(イ)樺太の南部およびこれに隣接するすべての島はソヴィエトに返還される。

(ロ)大連商港におけるソヴィエト連邦の優先的利益はこれを擁護し、該港は国際化され、またソヴィエト連邦の海軍基地としての旅順港の租借権は回復される。

(ハ)東清鉄道および大連に出口を供与する南満州鉄道は、中ソ合弁会社を設立して共同に運営する。ただし、ソヴィエト連邦の優先的な利益は擁護され、また中華民国は満州における完全な主権を保有する。

三、千島列島はソヴィエト連邦に引き渡される。

前記の外蒙古ならびに港湾及び鉄道に関する協定は、蒋介石總統の同意を要する。大統領はスターリン元帥からの通知をまって、この同意を得るための措置をとるものとする。

三大国の首班は、ソヴィエト連邦の

「第二次大戦に勝者なし」

在支米軍司令官ウェデマイヤー中将は、後に米大使がこの密約を蒋介石に通告した際、「蒋介石が示した反応を決して忘れることが出来ない」。彼は、連合国は、ソ連の戦後に対する意図を見誤ったとして、回顧録の表題を「第二次大戦に勝者なし」とした。

この要求が、日本国の敗北したあと確実に満足されることに意見が一致した。

ソヴィエト連邦は中華民国を日本の束縛から解放する目的をもって、自国の軍隊によりこれに援助を与えるため、ソヴィエト社会主義共和国連邦と中華民国とのあいだの友好同盟条約を、中華民国政府と締結するの用意があることを表明する。

●日本の首脳部が、この密約を知っていたら？

▽当然 戦争終結を 急いでいただろう

…… 海外公館からは「要注意」電報 ……………

大島浩ドイツ大使は2月18日、「ストックホルム情報」として「スターリンは日本に対する政策変更に同意した」、森島守人ポルトガル公使は21日発信の電報でリスボン発行の新聞の解説を紹介し、「スターリンは対米英関係の現実政策上、中立条約の廃棄、対日戦を決意したと考えられる節あり」と報告した。また岡本季正スウェーデン公使も26日着の重光外相宛電報で4月25日のサンフランシスコ会議を重視し、「特に発表したのは、ソ連が中立条約の廃棄通告を行い、この会議で日本を共同の敵と、宣言することになるのではないか」と具申した。

大島 浩(おしま・ひろ)

明治19(1886)～昭和50(1975)東京生まれ。陸軍中将。駐独大使館付武官を経て昭和13年駐独大使。翌年辞任するが、15年に再任。日独伊三国同盟実現を推進。A級戦犯で終身禁固刑、30年釈放

森島 守人(もりま・もりと)

明治29(1896)～昭和50(1975)金沢市生まれ。ハルビン総領事、東亜局長を経て昭和17年ポルトガル公使。30～38年社会党衆院議員。著に「陰謀・暗殺・軍刀」

岡本 季正(おかもと・すえまさ)

明治25(1892)～昭和42(1967)京都府生まれ。アメリカ局長、シンガポール総領事を経て昭和17年スウェーデン公使。戦後、27年にオランダ大使

決定的だった小野寺の「参戦決定」電報

「ソ連の対日参戦が決まった」。— スウェーデン公使館付陸軍武官小野寺信少将は参謀本部に打電した。情報提供者の元ポーランド陸軍参謀将校から寄せられた情報で、暗号電報の作業を受け持っていた妻百合子は、著書「バルト海のほとりにて」に「特に心して暗号に組んだことを覚えている」と書いている。

しかし東京からは何の返答もなかった。小野寺が電報が中央に届いていないことを知ったのは昭和58年。佐藤大使の本に「自分も政府もそれを知らなかったのは不覚であった」とあるのを読んだ時。百合子は「その時の夫の驚きは、大変なものであった」と書いている。

小野寺 信(おのでら・まこと)

明治30(1897)～昭和62(1987)岩手県生まれ。陸軍少将。参謀本部ロシア課員、陸大兵学教官を経て昭和15年スウェーデン公使館付武官。

小野寺は「独ソ戦」も予告

独ソ戦勃発(16年6月22日)の1か月以上も前から、「ドイツはソ連に向けて開戦準備をしている」と再三打電したが、「独ソ不可侵条約を結んでいるドイツが、独ソ戦なんてあり得ない」と

▽重光外相はじめ 政府首脳部が ヤルタ会談を
厳密に 検討しなかった罪は 大きかった
▽スターリンは すでに 革命記念日(19年11月7日)に
日本を「侵略国」と 非難演説していた
▽疑って 当然だったが 日本外交は
「溺れる者は 藁をも掴む」と云うのか
馬鹿正直に ソ連仲介の和平交渉に
望みをかけたりして 混迷を繰り返す

●重臣上奏は2月7日から始まった

▽現職の 阿部信行(勲) 米内(勲)を除き
平沼を皮切りに 広田弘毅 近衛 若槻 岡田
東条と 元首相6人 間に 元内大臣牧野伸顯
▽若槻は「前以て遠慮なく腹心を吐露しようじゃな
いか」と申し合わせ 意気込んで 臨んだのに
いざ 陛下の前に出ると
「目のあたりに陛下の御英姿を拝して
「降参しないさい」という意味のことは
なんとしても言上できなかつた」(胡)顯
▽ほとんど 結論らしい結論もなく
あいまいな形で 終わった中で
異色は近衛 ただ一人 強気なのは東条

●近衛の上奏は14日

▽2日前から上京して 平河町の吉田邸に
泊まり込み 二人で 上奏文を練り上げた
▽和紙8枚に書かれた 書き出しは
「敗戦は遺憾ながら最早必至なりと存じ候」
▽さすがの近衛も
天皇の前では「敗戦」とは云えず
「最悪なる事態」と 言い換えて 上奏を始めた
▽近衛が恐れたのは「最悪なる事態」よりも
それによって起こる 共産革命
▽天皇も「内心でその特異さに驚かれた
御様子だった」(藤田尚徳侍従長)
▽近衛は「終戦を急げ」の結論は 述べたが
一番肝心な どうすれば よいのかになると…
▽最大の障害は「かの一味」(勲)の存在
この一味を一掃し 軍の建て直しを行なえ
▽「皇道派を起用しろ」以外は 具体策は 何もない

する参謀本部に無視された。

阿部 信行(あべののぶき)

明治8(1875)～昭和28(1953) 石川県生
まれ。陸軍大将。陸軍次官を経て昭和14
年8月首相。中国大使、朝鮮総督歴任

広田 弘毅(ひろたのこうき)

明治11(1878)～昭和23(1948) 福岡県生
まれ。駐ソ大使、斎藤・岡田内閣外相を
経て昭和11年二・二六事件直後に首相。
A級戦犯として文官中ただ一人死刑に

牧野 伸顯(まきののぶあき)

文久1(1861)～昭和24(1949) 鹿児島生
まれ。維新の三傑大久保利通の次男。文
相、外相、宮内相を経て大正14年に内大
臣。宮廷勢力の代表として二・二六事件
で襲われたが難を免れる。吉田の岳父

近衛の上奏文

敗戦ハ遺憾ナカラ最早必至ナリト存候、
以下此ノ前提ノ下ニ申述候。

敗戦ハ我カ国体ノ瑕瑾ナルヘキモ、英米
ノ輿論ハ今日マテノ所国体ノ変革トマテ
ハ進ミ居ラス(勿論一部ニハ過激論アリ、
又将来如何ニ変化スルヤハ測知シ難シ)
随テ敗戦タケナラハ国体上ハサマテ憂フ
ル要ナシト存候。国体護持ノ建前ヨリ最
モ憂フルヘキハ敗戦ヨリモ敗戦ニ伴フテ
起ルコトアルヘキ共産革命ニ御座候。ツ
ラツラ思フニ我カ国内外ノ情勢ハ今ヤ共
産革命ニ向ッテ急速度ニ進行シツツアリ
ト存候。即チ国外ニ於テハソ連ノ異常ナル
進出ニ御座候。…

翻テ国内ヲ見ルニ、共産革命達成ノアラ
ユル条件日々具備セラレユク観有之候。
即生活ノ窮乏、労働者発言度ノ増大、英米
ニ対スル敵愾心ノ昂揚ノ反面タル親ソ氣
分、軍部内一味ノ革新運動、之ニ便乗スル
所謂新官僚ノ運動、乃之ヲ背後ヨリ操リ
ツツアル左翼分子ノ暗躍等ニ御座候。…

●東条の上奏は26日

▽「4月25日」に注目し この日付を12回も

▽戦局判断となると「成功不成功相半す」

▽藤田は「侍従長の回想」に 東条の認識は

「陛下を驚かせ、陛下の御表情にも

ありありと御不満の模様が見られた」

▽硫黄島は 米本土から8千^キ。日本は千数百^キ。

「補給能力は、距離の自乗に逆比例するから

日本は作戦的にも余裕がある」

▽本土空襲も「近代戦の観点からすれば序の口」

▽「ソ連は中立条約の廃棄を通告してくるかも知れ

ない。こうなっても、我は正義の上に立つ戦なり

りと、皇国不滅の精神に立つならば、悲観には

及ばぬ」最後は 精神論で結んだ

▽これが 首相 陸相に 参謀総長まで兼務して

2年9か月も 戦争指導してきた 東条の判断

— 藤田侍従長の言葉 —

陛下の心中深く、戦争終結のご決心がついたのも、あの重臣上奏の頃であったと拝察する。

●東京大空襲に、天皇は「被災地をこの目で見たい」

▽木戸内大臣の「思い切り簡単な方式で

ほとんど突然お出ましという形で」の 意向で

▽18日午前9時出発 深川の富岡八幡宮へ

▽焼け跡には まだ 死臭が漂っていた

「木戸日記」から(昭和20.3.18)

一望涯々たる焼野原、真に感無量なるものあり、この灰の中より新日本の生れ出でんことを祈念す。

▽天皇も 藤田に「これで東京も焦土になったね」

— 天皇の終戦の御製 —

爆撃にたふれゆく 民の上おもひ

いくさとめけり 身はいかならむとも

身はいかになるとも いくさとどめけり

ただたふれゆく 民をおもひて

天皇の終戦決断の心境は、この御製に尽くされているが、その思いはこの下町視察から。

昨今戦局ノ危急ヲ告クルト共ニ一億玉碎ヲ叫フ声次第ニ勢ヲ加ヘツツアリト存候。カカル主張ヲナス者ハ所謂右翼者流ナルモ背後ヨリ之ヲ煽動シツツアルハ、之ニヨリテ国内ヲ混乱ニ陥レ遂ニ革命ノ目的ヲ達セントスル共產分子ナリト睨ミ居リ候。…

戦局ノ前途ニ付キ何等カ一縷テモ打開ノ望ミアリト云フナラハ格別ナレト、敗戦必至ノ前提ノ下ニ論スレハ勝利ノ見込ナキ戦争ヲ之以上継続スルハ、全ク共産党ノ手ニ乗ルモノト存候。随テ国体護持ノ立場ヨリスレハ、一日モ速ニ戦争終結ヲ講スヘキモノト確信仕リ候。

戦争終結ニ対スル最大ノ障害ハ、満州事変以来今日ノ事態ニマテ時局ヲ推進シ来タリシ軍部内ノカノ一味ノ存在ナリト存候。彼ラハ已ニ戦争遂行ノ自信ヲ失ヒ居ルモ、今迄ノ面目上飽クマテ抵抗可致者ト存セラレ候。…

ソレハトモ角トシテ、コノ一味ヲ一掃シ軍部ノ建直シヲ実行スルコトハ、共産革命ヨリ日本ヲ救フ前提、先決条件ナレハ、非常ノ御勇断ヲコソ願ハシク存候。

— 東条の上奏 —

前責任者トシテ戦局ノ現状ニ対シ責任痛感シアリ。… 去ル二月七日ヨリ行ワレタル「クリミヤ」ニ於ケル三巨頭会談ガ今後ノ政戦両略ノ基礎タルベシ。其ノ一応表面ニ露ワレタル所ハ事ヲ対独処理ニ存スル如ク見ユルモ、其ノ裏面ニ於テ太平洋問題ガ大キク扱ワレ大体基礎的了解遂ゲラレルモノト思考ス。其ノ理由トシテハ日蘇中立条約ノ応否ヲ決スル最後ノ日四月二十五日ヲ選ビ桑港(サンフランシスコ)ニ於テ会議ヲ開キ、…

敵ハ四月二十五日ヲ目標トシテソレ迄ニ対日政戦両略ノ凡有(ありゆる)手ヲ打チテ日本ヲ立ツコト能ワザラシムルノ状態ヲ造リ上ゲル。独逸ハ蘇、米、英ニテソレ迄

●「重臣上奏」は直接には余り意味のないものに終わったが、宮廷政治の流れに明確な方向づけ

▽終戦模索の 天皇と木戸の意図が 合致

…… 終戦を口にすることはまだタブー ……
天皇は戦後間もなく藤田に「あの戦争のさ中に和平を言い出したら大変な内乱になったろう」。藤田も「私の実感としては、当時和平のことを口に出したら、政治家であれ軍人であれ、たちどころに陸軍の者に殺されてしまうだろうと思われたほどです」と語っている。

●東京憲兵隊は4月15日、吉田、殖田、岩淵、馬場逮捕

▽きっかけは「近衛上奏文」

▽吉田は 近衛から「牧野に見せてほしい」と頼まれ上奏文を筆写 大磯の別邸に保管

▽陸軍省資料調査部が 書生として 入っていたスパイが 写真に撮っていた

なぜ近衛を逮捕しなかったのか？
東部憲兵司令官大谷敬二郎少将は「もしやれば、近衛ら重臣に東条内閣を倒され、陸軍はその仕返しに近衛を失脚させるためやったと、世間からとられかねない。だから、近衛ら重臣には手をのばさないと決めていた。ただ、この際、吉田に連なる反戦主義者を捕まえ、高まってきた和平論に一撃を加えようとしたのだ」

▽家宅捜索でも 筆写の上奏文は 見つからなかった

▽吉田が とっさに「小りんさん」(妹猷子)に

「大事なものだから、隠しておいてくれ」

▽手渡された近衛 原田の手紙と一緒に 帯の間に

▽吉田の逮捕容疑は 軍事上の流言蜚語

・近衛上奏文を筆写し流布 ・「軍は自信を失い 士気沈滞」の反戦言動 ・「軍赤化」の中傷言動
吉田は取り調べに傲慢そのもの

一定時間の散歩、食事も平河町の差し入れが許され、吉田も「丁重に扱われた」。しかし取り調べには一切否認。殖田の調書にも「それはあいつが勝手に喋ったことだ」。上奏文筆写の写真には参ったと見え、調書には「私の思慮の至

二片付ケ終リ置ク。ソコデ四月二十五日ニ各国ヲ集メテ日本ガ手モ足モ出セヌト云ウ状態ヲ見セルト云ウ広イ手ヲ打ツ。コレガ敵ノ狙ウ所ナリ。…

硫黄島ニ侵寇シ来リ其ノ攻略ニ焦慮シアルモ、亦之ノ一ツノアラワレナリ。然ルニ、二月十六日、十七日機動部隊ノ艦載機空襲ハ当日ニ止マリ、第三日、第四日ト続行スルコトヲ得ザリキ。「サイパン」侵寇ニ於テハ機動部隊ヲ以テスル同島ノ攻撃ハ一週間モ継続セラレタリシガ之ヲ我本土ノ近海ニ敢テスルニ及ンデハ一日半以上留マルヲ得ザリキ。…

只今深刻ニ太平洋上ニ起リツツアル進展ニ対シテハ全体的ニ観察シテ成功不成功相半スト見ル所以ナリ。…又作戦地域ト各々ノ本土トノ距離ハ米本土ヨリハ八千^キ。我本土ヨリハ千数百^キ。(麒麟のこ)而シテ補給能力ハ距離ノ自乗ニ逆比例ス。斯ク考エ来レバ我国ハ作戦的ニモ余裕アルコトヲ知ルベシ。

空爆ノ程度モ…新聞報ニヨルモ独ニ対シテハ四千機ト伝ウ。距離カラ見テモ伯林(ベルリン)ヲ東京トスレバ四国又ハ岡山ノ基地ヨリ連日数千機ノ来襲トナル。我ニアリテハB29ハ二千数百^キ。ノ遠方ヨリ五日又ハ七日ニ一回百機内外ノモノガ来ルニ過ギズ。… 斯ク見レバ敵ノ本土空襲モ近代戦ノ観点ヨリスレバ序ノ口ナリ。此ノ位ノコトニテ日本国民ガヘコタレルナラバ大東亜戦争完遂ナドト大キナコトハ云エヌ。…

蘇連ヨリ中立条約廃棄ノ通告ヲヨコスコトモアリ得ベシ。斯クナリテモ我ハ正義ノ上ニ立ツ戦ナリト皇国不滅ノ精神ニ立ツナラバ悲観ニ及バズ。… 一度ヘコタレタランニハ爾後日本ハ度外視セラルベシ。カクナリテハ万事終焉ナリ。実ニ四月二十五日ノ前後ハ重大ナル時機ナリト思ウ。

らないため、軍を誹謗してまことに申し訳ないことをしたと思う。この点、お許しを願いたい。心境を新たに、戦争遂行に一国民として協力したい。詫びてはいるが、同じ調書に「誰が何と云ったって、英米と仲良くしないと、日本は繁栄する国ではない。戦争は一日も早くやめよ、英米に負けても国体は滅びない。国内が赤化されれば滅亡あるのみだ」と持論を展開。

▽陸軍省兵務局は 起訴を主張したが

新陸相 阿南惟幾の裁断で 不起訴に

▽5月30日 45日ぶりに 釈放された

…… 書生をスパイと知っていた？ ……………

清沢の「暗黒日記」(聊19. 12. 7)には「加納久朗氏の話によると、吉田茂のところにも憲兵隊がスパイを書生に住み込ませたとのことである」。加納は吉田が駐英大使のころ正金銀行ロンドン支店長をしていて、昵懇の間柄。吉田本人から聞いた話と思われる。

書生は吉田の逮捕と同時に姿を消したが、戦後間もなく「上官の命とはいえ、申し訳ないことをしました」と詫びに来ると、吉田は「忠実に任務を遂行したのだから別に謝る必要はない」。乞われるままに「この者、勤務ぶり真に良好なり」と紹介状まで書いて、知人に就職を世話してやったと云う。

▽鳩山一郎は「吉田君はこれで最高の免罪符を手に入れた」戦後 政権担当の道が開かれる

米軍は3月27日、沖縄西部の慶良間列島上陸

▽4月1日には 沖縄本島へ

▽近衛ら4重臣の間で 後継内閣の動き

3月10日の会合では 平沼が

「もう小磯内閣では駄目だ。

後は鈴木貫太郎さんに頼んだら、どうです」

▽重臣の意向は 27日

「鈴木を首相に、阿南を陸相とする内閣」

木戸も賛成し 鈴木内閣構想が 固まる

▽小磯内閣は 4月5日総辞職

阿南 惟幾(あみな・こしあ)

明治20(1887)～昭和20(1945)東京生まれ。陸軍大将。第2方面軍司令官、航空総監を経て昭和20年4月鈴木内閣陸相。終戦の夜、抗戦派を慰撫し割腹自決した

加納 久朗(かのう・ひさあき)

明治19(1886)～昭和38(1963)千葉県生まれ。上総一宮藩主の末裔で子爵。正金銀行ロンドン支店長を経て昭和30年日本住宅公団総裁、37年千葉県知事

鳩山 一郎(とよま・いちろう)

明治16(1883)～昭和34(1959)東京生まれ。大正4年に政友会から衆議院議員(当選15回)。犬養・斎藤内閣文相。戦後日本自由党総裁となるが公職追放。解除後、吉田と政権の座を争い29年日本民主党結成、総裁となり首相。30年自民党を結成し総裁、日ソ国交回復を実現した

「戦中日記」から(聊20. 3. 31)

戦況はすこぶるわるいが、国民は、そう悲観するに及ばぬ。もう、次の時代が目の前に迫っている。また、一億玉砕なんてかけ声も出ているが、そんなことはやらすべきでないし、またやらそうとしたって簡単にできるものか。

鈴木 貫太郎(すずき・かんたろう)

慶応3(1867)～昭和23(1948)父親が代官をしていた関宿藩飛び地の大阪和泉で生まれる。海軍大将。連合艦隊司令長官、軍令部長を経て昭和4年侍従長となり二・二六事件で襲撃され重傷を負う。19年枢密院議長。20年4月首相に就任し終戦に当たる。著に「鈴木貫太郎自伝」

44

(600-605) 遺文九 六書
方輿總要 (600) 地理圖一 (605) 地理圖
皇朝通志 (600) 地理圖一 (605) 地理圖
皇朝通志 (600) 地理圖一 (605) 地理圖

(605-610) 遺文九 六書
皇朝通志 (605) 地理圖一 (610) 地理圖
皇朝通志 (605) 地理圖一 (610) 地理圖

(610-615) 遺文九 六書
皇朝通志 (610) 地理圖一 (615) 地理圖
皇朝通志 (610) 地理圖一 (615) 地理圖

(615-620) 遺文九 六書
皇朝通志 (615) 地理圖一 (620) 地理圖
皇朝通志 (615) 地理圖一 (620) 地理圖

(620-625) 遺文九 六書
皇朝通志 (620) 地理圖一 (625) 地理圖
皇朝通志 (620) 地理圖一 (625) 地理圖

皇朝通志 (625) 地理圖一 (630) 地理圖
皇朝通志 (625) 地理圖一 (630) 地理圖

皇朝通志 (630) 地理圖一 (635) 地理圖
皇朝通志 (630) 地理圖一 (635) 地理圖

皇朝通志 (635) 地理圖一 (640) 地理圖
皇朝通志 (635) 地理圖一 (640) 地理圖

皇朝通志 (640) 地理圖一 (645) 地理圖
皇朝通志 (640) 地理圖一 (645) 地理圖

皇朝通志 (645) 地理圖一 (650) 地理圖
皇朝通志 (645) 地理圖一 (650) 地理圖

皇朝通志 (650) 地理圖一 (655) 地理圖
皇朝通志 (650) 地理圖一 (655) 地理圖

皇朝通志 (655) 地理圖一 (660) 地理圖
皇朝通志 (655) 地理圖一 (660) 地理圖

皇朝通志 (660) 地理圖一 (665) 地理圖
皇朝通志 (660) 地理圖一 (665) 地理圖

皇朝通志 (665) 地理圖一 (670) 地理圖
皇朝通志 (665) 地理圖一 (670) 地理圖

皇朝通志 (670) 地理圖一 (675) 地理圖
皇朝通志 (670) 地理圖一 (675) 地理圖

皇朝通志 (675) 地理圖一 (680) 地理圖
皇朝通志 (675) 地理圖一 (680) 地理圖

「硫黄島玉砕と本土空襲激化」関係年表

昭和12	1937	7. 7 盧溝橋事件勃発。支那事変始まる	昭和19	1944	12. 13 B29、名古屋に初来襲。三菱重工爆撃
		11. 20 大本営と大本営政府連絡会議設置			12. 19 大本営、「レイテ決戦放棄」を決定
14	1939	5. 11 満蒙国境ノモンハンで国境紛争			12. 23 硫黄島の交通路を洞窟式に築城工事
		8. 20 ノモンハンで日本軍、壊滅的損害			12. 25 海軍、松山に本土防空の第343航空隊
		9. 1 第二次世界大戦始まる	20	1945	1. 1 天皇は軍服のまま御文庫の庭で四方
15	1940	9. 27 日独伊三国同盟、ベルリンで調印			拝小磯、「比島全域が天王山」と放送
16	1941	4. 13 日ソ中立条約、モスクワで調印			1. 6 米艦隊、リングエン湾に進入、艦砲射
		6. 22 ドイツ軍、ソ連に侵攻。独ソ戦始まる			撃を開始◆天皇、木戸内大臣に重臣招
		10. 18 東条英機内閣発足。東条は陸相兼任			致の希望◆吉田ら近衛を訪ね、天皇に
17	1942	12. 8 太平洋戦争始まる。真珠湾攻撃			「和平促進」の進言を要望
		4. 17 空母発進の米爆撃機、本土初空襲			1. 9 米軍、ルソン島リングエン湾に上陸
		6. 5 ミッドウェー海戦。主力空母4隻喪失			1. 11 「三年会」、外相官邸で第1回会合
		6. 11 吉田茂、木戸幸一内大臣に「終戦工作			1. 13 天皇、木戸に重ねて重臣招致を催促
		のため近衛文麿のスイス派遣」提議			1. 18 大本営、本土決戦準備の大綱を決定
		8. 7 米軍、ガダルカナルに上陸開始			1. 20 マリアナ基地B29司令官にルメイ
		9. 21 「超空の要塞」B29試作1号機が完成			1. 22 米軍、「2月19日硫黄島上陸」を決定
18	1943	1. 14 米英首脳がカサブランカ会議。「日独			1. 30 近衛ら4重臣、木戸に重臣の意向伝達
		伊三国の無条件降伏の原則」決定			2. 4 米英ソ三国首脳、ヤルタで会談
		2. 1 ガダルカナル撤退開始(7脱7)			2. 5 厚木に海軍第302航空隊新設
		9. 8 イタリア無条件降伏			2. 7 平沼騏一郎が重臣上奏(9日広田弘毅、
		10. 19 スターリン、訪ソのハル国務長官に、			14日近衛文麿、19日若槻礼次郎、牧野伸
		独降伏後の対日参戦の意向表明			顕、23日岡田啓介、26日東条英機)
		10. 21 明治神宮外苑で「出陣学徒壮行会」			2. 10 スターリン、ルーズベルトに「独降伏
19	1944	3. 8 陸軍、帝都防空の第10飛行師団編成			後2、3か月の対日参戦」を約束
		6. 6 連合軍、仏ノルマンディ上陸			2. 11 ヤルタ会談終わる。共同宣言発表
		6. 8 109師団長栗林忠道中将、硫黄島着任			2. 16 米軍、硫黄島に対する砲撃開始◆米
		6. 15 米軍、サイパン島に上陸開始			機動部隊艦載機、関東、東海を空襲
		6. 16 成都発進のB29、北九州を初空襲			2. 19 米軍2個師団3万、硫黄島に上陸
		6. 19 マリアナ沖海戦。空母3隻を失う			2. 20 米軍、硫黄島の千鳥飛行場占領
		6. 26 小笠原兵団(栗林兵団長)の戦闘序列			2. 23 米軍、硫黄島南端の摺鉢山を占領◆米
		発令。戦車26連隊(西竹一中佐)編入			軍「硫黄島で1分間に喪失3名」と発表
		7. 7 サイパン島守備隊玉砕			2. 24 米軍、千鳥飛行場の修復開始
		7. 18 東条内閣総辞職			2. 25 200機のB29、大雪の東京を初のレー
		7. 22 小磯国昭・米内光政連立内閣成立			ダー焼夷弾攻撃。2万戸が罹災
		8. 2 テニアン島守備隊玉砕(7月31日)			3. 3 マニラ陥落
		8. 5 大本営政府連絡会議を廃止して最高			3. 4 硫黄島の残存兵力約4,100名に
		戦争指導会議を設置			3. 10 334機のB29、東京大空襲。江東全滅
		8. 10 米軍、サイパンとテニアンをB29、B			3. 12 硫黄島に爆撃機用滑走路完成
		24基地として使用開始			3. 16 小磯首相、特旨により大本営に列す
		8. 19 最高会議、御前会議で「今後採るべき			3. 17 栗林、大本営に訣別電報打電
		戦争指導大綱」決定◆参謀本部、「島嶼			3. 18 天皇、下町の被災地を視察
		守備要領」示達。水際撃滅戦法改める			3. 21 大本営、「硫黄島玉砕」を発表
		9. 19 栗林、地下洞窟陣地の戦闘計画示達			3. 26 栗林、将兵400名と共に最後の突撃◆
		10. 1 帝都防空本部発足			米軍、沖縄西部の慶良間列島に上陸
		10. 3 米統合幕僚会議、ニミッツに「硫黄島			3. 27 B29、関門海峡に機雷1千個投下
		小笠原諸島に一つ以上の拠点占領(作			4. 1 米軍、沖縄本島に上陸
		戦期20年1月20日)」を命令			4. 5 小磯内閣総辞職。鈴木貫太郎に大命◆
		10. 20 米軍20万、レイテ島上陸			ソ連、日ソ中立条約不延長を通告
		10. 24 レイテ沖海戦。戦艦武蔵沈没			4. 12 ルーズベルト死去
		10. 25 神風特別攻撃隊、レイテ沖に出撃			4. 15 東京憲兵隊が吉田茂、殖田俊吉、岩淵
		11. 1 サイパン発進のB29、東京を偵察			辰雄、馬場恒吾を逮捕
		11. 7 スターリン、革命記念日に日本を「侵			5. 7 ドイツ、連合軍に無条件降伏
		略国」と非難演説◆第10飛行師団長、			5. 30 吉田茂、45日ぶりに釈放
		B29に対する特攻隊編成を下令			7. 26 連合軍、ポツダム宣言発表
		11. 10 汪兆銘南京政府主席、名古屋で病死			8. 6 広島に原爆投下(9日長崎)
		11. 24 B29、中島飛行機武蔵工場を爆撃			8. 9 ソ連軍、満州、朝鮮、樺太で侵攻開始
		11. 27 陸海軍航空隊、サイパン、テニアンを			8. 15 敗戦
		攻撃、46機のB29を大破、損傷させる			12. 16 近衛文麿、戦犯に指名され服毒自殺
		11. 30 B29、東京を初の夜間レーダー爆撃	21	1946	5. 22 第一次吉田茂内閣発足